

奉天のアパートの窓から鉄西の満州ビール奉天工場の煙突が良く見えます。会社が取引のあるビールの棧函を納めていた実績のあった、工場長の市来さんをよく知っていましたので、午後、中国人の汚い服に着替えて、鉄西へ行きました。

満州ビールの工場の門にソ連兵が三人立っていた。

工場長が出て来て「鶴見さん、営口脱出のこと心配していましたが、お元気でしたか、今どこにおられますか、当方もソ連の命令で、ビールの製造を始めます。昨日の打ち合わせで、まだ、人の手配ができておりませんので、ビールの製造と棧函の修理等をやっていたきたいのです。

営口より三十人か三十五人ぐらい集めることになっています。九月一日から協力していただきたいのでよろしく願います。まことにすみませんが、金はありませんので、毎日出来高精算です」と言っただけを三杯ほどごちそうになりました。おいしかったビールの味が今でも舌に残っています。

市来工場長に感謝し、戦後の難民の苦しい一夏の思

い出を書いてみました。

## 私の八月十五日

兵庫県 吉村 格

終戦直前の五月十五日、新京神社の春祭の日に、召集を受ける。二十年前の徴兵検査で、第二乙種、兵役に関係なしと云われ、新京にある南満州鉄道株式会社本部で、参事課長として、対ソ作戦計画に参与していた私には、予想もしない召集である。とにかく三か月と言われて入隊したのが、延吉駐屯の満州第一五二六六部隊、石井忠三中尉の中隊である。

入隊時に支給されたのは、つぎはぎだらけの古い軍服、銃も剣ももちろんない。東満の山並をのぞむ山中に急造された掘建小屋に起居して、毎日の作業は山腹に穴を掘る手作業である。

八月十三日夜であったか、突然の全員集合。小隊分隊の編成替えと、それぞれの隊長任命。突然に、吉村、

と呼ばれたが、なんのこともかわからない。「吉村は南満州鉄道株式会社が戦中の榮譽にめんじて、特に第三小隊第四隊長を命ずる」とのこと。

「いったい満鉄に在職したことをどうして知っているのであるか。」

分隊長八人の氏名をたしかめ、全員に新品の軍服を支給され、小銃実弾の配給を受けて行進を開始する。

すごい豪雨の中をずぶ濡れになりながら考えると、第四分隊というのは、爆薬を抱いて敵戦車に飛びつく任務であると気づく。ああこれでこの世ともお別れかと思つた途端、子供達の顔が、クルクルッと目の前を回転する。

夜明けと共に雨がやみ、空にはあかあかと太陽が照り始めたらもうたまらない。前夜来ズブ濡れの衣服にむせかえり、頭はがながんする。へたり込んで脱落する者も出てくる。助けあつて行軍するうちようやく小休止、何時間ぐらい経つたであろうか、夕方近く、附近の小学校々舎に入って大休止。今夜はここで休めるのかと安堵して熟睡する。

翌日正午頃、ようやく乾燥した軍服を来て行軍を再開する。しばらく進んで気がつくと昨日行軍してきた道を逆戻りしてはいないか。何事かと不審に思いながら小休止していると、朝鮮の青年が近づいて、戦争はもう終つたんだと、日本は負けたんだという。

ああ、これで死ななくてすんだのかと、ただそれだけが、頭の中を駆けめぐる。

夕方近く、出発前に起居したもとの掘建小屋に戻る。驚いたことには、前々日出発のとき残して置いた品物は何一つ残っていない。毛布や衣類はもとより、炊事用品の影もない。

八月末の朝、命令されて山あいの広い草原に集合させられて驚く。何千人に達するであろうか。兵隊の大群である。こんな所にも多数の兵隊がいたのか、ただ啞然としてみとれる。間もなくソ連将校が数人現れて、日本の将校達を全部トラックに乗せてどこかへ連れ去る。残つた兵隊達は命のままに隊伍を組んで行進を始める。到着したのは、忘れもしない五月に召集されて入隊した延吉のトラック兵舎である。兵

舎の中はもとより、外の空地も兵隊で充滿している。草原で野営する。

いつの間にか、この收容所の人数が順次減っていく。後で思えば、シベリアへ連行されたのであるが「出発、<sup>グバイ</sup>出発」と出発して行く。

ソ連の軍医がきて、元氣そうなものから連行する。中には希望してその中に加わる者も。私は、満鉄在職当時、軍事輸送計画に関連して、第一次世界大戦の記録を研究していた。戦後一か月や二か月で捕虜が祖国に帰った例はない。ソ連軍の軍医の検査を受けるが、神経痛のため歩行困難の故をもって收容所に残留して越冬する。

收容所は、ノモンハン事件のとき急設した粗末なバラックで、下はようやく座れる程度の高さに二階を設けた棧敷である。夜は同じ方向に頭を向けて寝ることもできないから、交互に反対方向を頭にして寝る。入浴もなければ、洗濯もない。シラミが繁殖するが、日当りに出て裸になってつぶすより仕方ない。

十月頃からであろうか、発疹チフスが大流行する。

にわか発熱して意識も速くなる。薬品らしい物はくれたが、なんの薬かわからない。夜中に奇声を発したり、うなったりして、つぎからつぎへと死んで行く。私をはさんで両隣で三人死んだ。死ぬと軍服をはがし、裸同然にして死体壕に放りこむ。すでに死んだ同僚の遺体が積み重なっている。

今はあの壕はどうなっているのだろうか。土に埋もれた白骨壕のままではなからうか。

## 終戦時を偲んで

鳥取県 坂出 武雄

終戦当時、私は満州電信電話牡丹江管理局で、人事、厚生などの業務に従事していた。

八月九日早朝、非常召集で出勤して以来、前線から避難してくる社員の受入れに追われた。幸いに七月中旬、秘密裡に命令を受け、私が作製した「前線社員收容計画」に基づき、おおむね円滑に各社宅に收容する